深沢七郎
盆栽老人と
その周辺

書き下し
特別作品
文藝春秋

盆栽老人とその周辺

昭和四十八年五月二十五日　第一刷

定価　八五〇円

著者　深沢七郎
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三
印刷所　凸版印刷
製本所　加藤製本
製函　紙パ商事

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Shichiro Fukasawa 1973　Printed in Japan

0093—650020—7384

盆栽老人とその周辺

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

私が「水沼老人」の名を知ったのは、勿論、この老人がこの地方で有名な盆栽作りだという理由からだが、それにしても、その道の第一人者であると、余りにも決定しているのには驚いていた。どんな第一人者でもそれを否定する反対派の者があったり、ほかにも、それに対応するくらいの相手があるものだが、「水沼老人」はその道では最高に決められていたのだった。

盆栽作りはこのところ各地で盛んになっているそうだが私は全然興味がなかった。が、この土地へ移転してから、ここではどの家にも盆栽の鉢が並んでいるほど盛んなのを知っ

たのだった。なぜなら、この土地は盆栽のメッカとも知られている埼玉の「安行」には30キロくらいしか離れていないし、盆栽村として全国に知られている大宮市の盆栽村とは20キロほどしか離れていないからだった。だからここが盆栽作りが盛んなのだということも私は越してきてから知ったのだから私は盆栽については何も知らなかったということなのだ。盆栽が全国的に盛んになってきたということを私は知らなかった。

まず、私たちの土地では1カ月に6回も植木市が開かれる、「2の日」と「3の日」である。植木市といっても農家相手だから野菜の苗も出廻っていた。トマト、ナス、ネギ、カボチャなどの苗も農家では手のまわらない早い時期に苗を仕立上げて売るのだった。勿論、野菜苗は、種を畑に直接播いて育てるのだが、温室で早く仕上げた苗は僅かな本数だが植木市で買って自家用に使うために早く成長させるために買うのだった。農家でも畑で収穫出来る時期までは苗は買って育てるのである。

私がその植木市で野菜苗を買いに行ったとき、植木の苗——松やカラ松、真柏などの盆栽苗が偶然に目についたのだった。その盆栽苗の並んでいる売場には顔見知りの人たちが数名もいたのだった。

「なにを買いに？」

と私は聞かれた。ここへ来る人達は盆栽苗の小苗を買いに来ているので私もそれを買いに来たのだと思われたらしい。

「いや――、ぜんぜん、経験もないですよ」

と私は答えるが、こんな答えは謙遜していると思われてしまうらしい。

「あなたは何が主力ですか？」

「……」

「松ですか？　さつきですか？」

と、これらの質問は苗を売っている植木屋さんではなく買いに来ている人たちの質問である。

「だめです、ほんとに、なにも育ってないですよ」

と私は言う。

「ほんとですか、少しやってはどうですか」

とも言われてしまう。

「誰でも10鉢や20鉢はやっていますよ」

と言われてしまう。20鉢などとは私には大ヘンな鉢数だが、この人たちには20鉢ぐらい

では数の中に入らないらしい。

そこで私は松の苗を2本買った。話をしているうちに2鉢ぐらいは「育ってみよう」という気になったのだった。2本で6百円で、鉢は1鉢30円だから2本で6百60円になるのだが、それから2日ばかりたってから気がついたことは、とんでもないことをやりだしたものだと後悔するハメになったのだった。わずか2鉢でも毎日水をやらなければならない手数のかかることで、まだ2日ばかりだがこれを5、6年ぐらいつづけてやらなければ盆栽を作ることにはならないのだと思うと、2鉢でも災難みたいなことをはじめたものだ、なぜ苗などを買ったのだろうとも思うほどだった。

私の買った2本の松の小苗はその夏まで、わずか3カ月もたたないのに枯れてしまった。「枯れて、よかった」と思ったりしたが、それまでには近くの農家の為平じいさんがときどき来て

「ダメだね、水をやらなければ」

と来るたびに水をやってくれたが枯れた苗である。枯れた2本の苗は買うとき

「水沼の御隠居さんでも、こういう苗から仕立てるんですよ」

と植木屋さんが言った言葉が耳についていた。ここへ移転してきて、いつとはなく、聞

き覚えてしまったような「水沼老人」という名の盆栽作りの老人は、誰にでも盆栽という言葉の代名詞のようにも使われているほどである。

「どうですか、一度見せてもらいに行きませんか」とそのじいさんに誘われた。盆栽を仕立てるのはダメだがよその盆栽を見るのはよいだろうという為平じいさんのすすめである。

その為平じいさんも水沼老人の盆栽はまだ見に行ったことはないそうである。私を誘って一緒に行くのだが、案内してもらう人――つまり紹介者がなければだめだが、その紹介者もあって、それはやはり町のガソリンスタンドの若大将で「盆栽を沢山やっている」そうである。

そのガソリンスタンドは町の入口で、いつもその前を通っているのだ。

その日、私達は水沼老人の家の盆栽を見せてもらうので、案内をしてくれるガソリンスタンドの若大将の家に行ったのだった。

「私の先生です、私は弟子ですよ、水沼の先生の」

とガソリンスタンドの若大将は言っている。ここでは水沼老人は「水沼の先生」と呼ばれているようだ。ここで、為平じいさんは

「おたくの盆栽を、まず、見せていただきましょう」

と言った。

「いや、見せる程のものは何一つもないですよ」

と若大将は言いながら

「どうぞ、こちらへ」

と先に歩いていく、ガソリンスタンドの裏に住居があって、盆栽はその裏のほうにあるらしい。ここで為平じいさんは私の耳許で「見せてもらわなければダメですよ、だれでも自慢で作っているのですからね」とささやくように教えてくれる。つまり、水沼老人の盆栽を見るなら、「自分のも見てくれ」と思っているらしい。

「いいですか、褒めなきゃダメですよ、自慢で作っているんですからね」

と為平じいさんはまた、ささやいた。

若大将の住居は立派な洋間の別棟があって、私たちはそこへ案内された、豪華な革のソファと椅子のセットがあって、(こんな、田舎に文化的な)と驚かされた。その入口には、これは、何という見事な松の盆栽だろう、幹の高さは40センチぐらいだが根本は直径10センチもある太さである。

「すごく立派な、松ですね」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

と私は思わず、唸るように為平じいさんに言った。
「たいしたものですよ、まず、買うとすれば3万円でしょうね」
と為平じいさんは言った。
「いやア、たいしたことはありませんよ、これは、鉢のほうが松よりも上等で、松が5万円なら、鉢は10万円でしょう」
とガソリンスタンドの若大将は教えてくれた。(10万円)と私は驚いて鉢を眺めた。どこがいいのか判らないが、そう知らされると特別な色つやの鉢のようである。これはむずかしいことになったと思ってきた。盆栽を眺めるには鉢を見る知識も勉強しなければならいことになったからである。それに、盆栽の値段というのも私の考えているよりかなり高値なようである。3万円だろうと為平じいさんが言っていた松は5万円らしい。
「そうでしょうね、3万円じゃ買えないと思いましたよ」
と為平じいさんは顔をあからめて訂正した。5万円の松の木を3万円だと言ってしまったのは失礼なことになるはずである。この様子なら、(うっかり、値段のことは言えないナ)と私は察した。だから、盆栽を見ることは金銭的なことには触れないほうがいいと気がついた。そう思っていると

「こちらにあるのは、どれも、2、3万円程度のものですよ」
と若大将が言って前の出窓を開けて下を指さした。私は立ち上って、窓のそばに行って下を眺めて「アッ」と思わず声をたててしまった。窓の下には見事な松の盆栽が50鉢ぐらい並んでいる。そのどれも、この部屋に飾ってある5万円の松の木と同じぐらいの太さである。もっと驚いたのは、その鉢も、10万円だといわれた鉢と同じような鉢が並んで植えられているのだった。
「たいへんな盆栽ですね」
と私が言うと
「これは、たいへんな財産ですよ」
と為平じいさんが言った。
「そうでしょうかねえ」
若大将は言って
「まあ、私が年とった頃には財産になるでしょう」
と言っている。これはいまでも財産だが、年月がたてばもっと大きな財産になると知らせているようでもあった。

「たいしたことはありません、まだまだ、いたずら程度ですよ私などは、水沼の先生にくらべたら」

と若大将は言って部屋から出た。

「こちらをみて下さい」

と歩いて行くと洋間の前の庭のうしろに廻った。そこで私はまた（あッ）と思わず声を立てた。そこには、松の苗木が、畑のように植えてあるのだった、どれも、私が植木市で買った苗の3倍も太い松である。どれも私の買った松と同じ幹の高さだが、これは、たしかに、私が植木市で買った松苗より、おそらく、3倍から5倍の値段がするらしい。

「いや、これは、1本、千円はしますねえ」

と為平じいさんは言った。金銭的なことは言わないほうがいいではないかと私は思っているのだが為平じいさんは、なんとなく値段にふんで盆栽の価値をきめようとするらしい。

「いやア、千円はしないでしょう」

と若大将は言っているが

「まア、5千本ばかりありますからねえ、たいしたことはないですよ」

と言っている。5千本というのは大へんな数だが、5千本では（たいしたことはない）

と言うが、どうやらこれは、5千本ということが誇りのようでもあるらしい。
「金じゃないですよ」
と若大将は言ったので私はほっと安心した、ここで、若大将と、ちょっと離れたので為平じいさんは小さい声で
「1本、千円はしないと言うが、千円では売らないよ、もっと高くなければ」
と、ささやくように言うのだった。盆栽の値段は、とても想像出来ないということがあとで、だんだん私も判ってくるようになったが、このときは、よくわからない。趣味で作っているのだと思っていたからだが、趣味でも値段をつけるのが当り前らしい。為平じいさんは若大将がこっちへ来たので、5千本の松の中の1本を指さして
「これと、あれと、2本、2千円でどうでしょう、譲ってもらいたいのですが」
と言いだした。趣味のものを売ってくれというのは失礼ではないかと思うのだが。
「いや、よいものばかりを売ってしまうと、悪いものばかり残ってしまいますからねえ」
と若大将は売るのを断わった。やはり趣味のものを売ってくれというのは失礼だったのだ。
「これは、3年ばかりたてば、1本、1万円にはなるでしょう、物価はあがるばかりだし、

鉢も値上りするばかりだから」

と若大将は言った。趣味でも、やはり値段をつけることがきまっているらしい。とにかく、若大将はこんなに沢山持っているけれども売る考えはないようだ。

私達はそこでお茶をご馳走になって若大将と3人で水沼老人の家に行くことになった。若大将がくるまを運転して乗せて行ってくれることになった。

「あなたも、やりませんかねえ、盆栽を」

と若大将は私に言った。

「だめですよ、水をやるのが面倒くさいですから、2本、松を枯らしてしまいましたよ」

と私は言ったが

「やりなさいよ、2ツばかりの鉢だから水をやるのが面倒ですが、20鉢とか、30鉢とかは誰でもやりますよ」

と若大将は言っている。

「盆栽は最低10年ぐらいやらなければダメですから、やるなら、50鉢ぐらいやらなければツマラないですよ、10鉢や、20鉢で、5年も、10年も育ててはツマラないでしょう」

と、助手席に乗っている為平じいさんもすすめてくれる。

「なに、3年もやればダイブ見られるようになりますよ」
と若大将は言って
「まあ、20鉢ぐらいからやりはじめるといいですよ、それくらいなら私がゆずってあげますよ」
と若大将は譲ってくれると言いだした。
「水がやれますかな？　私は」
と私は自信が全然ない。2鉢の松に水をやることにこりてしまったからだ。
「水をやるなんてことは習慣ですよ、慣れれば毎朝水をやることがたのしいことになりますよ」
と若大将は言う。
「若大将のところは水道の栓をひねれば雨が降ったように水をまくようになっているが」
と為平じいさんが言うと
「いやア、ジョロで水をやる場所が3カ所ばかり、百本ぐらいずつ」
と若大将は言うので私は驚いた。
「ジョロでやるですか、手で？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com